

カナダガン (*Branta canadensis*) に関する情報 (案)

原産地：北アメリカ

定着実績：神奈川県(丹沢湖など)や山梨県(河口湖、山中湖など)、静岡県(田貫湖など)、茨城県(牛久沼など)では、近年まで定着又は現在も定着が確認されている。

評価の理由

- ・ 増殖率が高く、ニュージーランド、ヨーロッパに導入されて爆発的に増加したことが確認されている。
- ・ 我が国においても、一部地域で定着が確認されており、野外に定着している個体を放置すれば、大幅に個体数の増加や分布域の拡大を招く可能性がある。
- ・ その場合、在来の種シジュウカラガン (*Branta hutchinsii*) や他の在来ガン類と交雑する可能性が危惧されている。
- ・ このほか、植物への食害による環境改変や食物をめぐる在来種との競合、農作物への被害が発生する危険性が考えられる。

被害の実態・被害のおそれ

(1) 生態系に係る被害

- 在来の種シジュウカラガン (*B. hutchinsii*) と交雑する可能性が危惧されている。
- カナダガンが定着している丹沢湖から直線距離で約 30km に位置する相模川に 2008 年、シジュウカラガンが飛来しており(文献)、交雑の危険性が危惧されている。
- 茨城県牛久沼に定着したカナダガンは別種であるガチョウ (*Anser anser ver. domesticus*: ハイイロガンを家禽化したもの) との異種間の交雑個体が生まれており、シジュウカラガン以外のガン類との交雑も危惧される(文献)。

(2) 農林水産業に係わる被害

- 茨城県牛久沼で生まれたカナダガンとガチョウの交雑個体が水田のイネを食害した事例が確認されている(文献)。

(3) 人的及び社会経済に係る被害

- 海外では飼育由来の留鳥化したカナダガンが増加した地域で、草地の過食、水草への食害、水際の土壌流出などが問題となっている(文献)。
- 分布域であるアメリカでは、都市公園などに定住して渡りをしない個体が急増し、繁殖期にヒナを守るため人を攻撃する、糞をまき散らすなどの被害が深刻化している(文献)。

被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 自然界での種間交雑については、現状では定かでないが、在来の種シジュウカラガン (*B. hutchinsii*) や他のガン類と交雑するおそれがある。

(2) 社会的要因

- 人為的に持ち込まれ、意図的に放鳥されたと推測されている。

特徴ならびに近縁種、類似種について

- 国内には、かつて種カナダガン (*B. canadensis*) の亜種とされていた種シジュウカラガン (*B. hutchinsii*) が飛来する(文献)。
- 在来の種シジュウカラガンには亜種シジュウカラガン (*B. h. leucopareia*) と亜種ヒメシジュウカラガン (*B. h. minima*) の2亜種が知られている(文献)。

その他の関連情報

- 増殖率が高く、1ペアが5～7年の間に、50から100個体まで増加する例が知られている(文献)。
- 日本に定着した個体群は亜種オオカナダガン (*B. c. moffitti*) と推測されている(文献)。
- 北ヨーロッパ(スカンジナビア半島等)へは、亜種タイセイヨウカナダガン (*B. c. canadensis*) が、イギリスへは亜種タイセイヨウカナダガン (*B. c. canadensis*) と亜種オニカナダガン (*B. c. maxima*) が導入されたと考えられている(文献)。
- イギリスでは、1953年にそれまで3000羽だったカナダガンが、毎年8%の割合で増加し、1999年には82,550 - 130,000羽(46年間に28～43倍)にまで増加した(文献)。
- 過剰に増加したカナダガンによる環境影響事例として、土の踏み固めによる植物の生育阻害や過剰な採食による裸地化とそれに伴う表土の流出、1羽が1日当たり排出する0.7kgもの糞による水質悪化などの影響が知られている(文献)。
- 神奈川県山北町(丹沢湖)の個体群(11羽)は、2010年に学術捕獲として9羽が捕獲され、7羽は動物園にて終生飼育、2羽は標識後放鳥され追跡調査が実施されている(文献)。
- 山梨県富士河口湖町(河口湖)の個体群(約50羽)は、2012年4月より有害鳥獣捕獲が2013年6月までに4回実施され、合計42羽が捕獲された(文献)。

注意事項

- 在来の種シジュウカラガン(*B. hutchinsii*)との交雑のほか、被害の実態について、今後とも科学的知見の集積が望まれる。
- 在来種に対する影響を考慮し、これ以上放鳥すべきでない。

主な参考文献

- 加藤ゆき (2010) カナダガン捕獲大作戦. 自然科学のとびら, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 16(2):10-11 p.
- 川上和人・叶内拓哉 (2012) 外来鳥ハンドブック. 文一総合出版, 東京.
- 呉地正行 (2009) とんでもないハイブリットなガンの問題. 全国ガン・カモ類飛来情報 HP 掲載. <http://www.jgoose.jp/2008/0708haiburit-4.html>
- USDA(2003) Fact sheet: Managing Canada goose damage, USDA-Animal and Plant Health Inspection Service, 18pp.
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 東京三田.
- Cleary, E. C. (1994) Waterfowl. Pages E-129 to 138 in S. E. Hygnstrom, R. M. Timm, and G. E. Larson, eds. Prevention and Control of Wildlife Damage. University of Nebraska Cooperative Extension, US Department of Agriculture/APHIS/ADC, and Great Plains Agricultural Council cooperating.
- 石井隆・葉山久世・加藤ゆきほか (2013) 河口湖で野生化していたカナダガンの袋網を用いた捕獲の記録. 日本野鳥の会神奈川支部. BINOS Vol.20:9-20p.
- 呉地正行・久米宗男 (2012) 外来種カナダガン野生化の経緯と海外の事例. シンポジウム「富士山にカナダガンは似合わない」(神奈川県自然保護協会 カナダガン調査グループ主催)講演資料. <http://kume.eco.coocan.jp/goose/kawagutiko.pdf>